

## 書 評

### Book Review

アシェンソ・アデリノ著 (川鍋襄訳, 田村脩監訳)

『遠藤周作——その文学と神学の世界』

教友社, 2013年, 501頁.

Adelino Ascenso, *Transcultural Theodicy in the Fiction of Shusaku Endo*, Tesi Gregoriana Teologia 170, Gregorian & Biblical Press, Roma, 2009.

#### 1. 概要

本書は、遠藤周作の小説作品全体を神学の立場から批評した初めての本格的な研究である。遠藤周作の作品に関しては、これまで文藝批評や象徴論や文化受肉論の視点からの多角的な研究が数多く提示されてきた。しかし、神学の視点からの研究は方法論が確立しておらず、困難とされ、嫌遠されていたとおもわれる。ところが、アシェンソ・アデリノは、遠藤周作の心の動きが作品の形成にどのように反映されていったのかを「想像力」の解明をとおして普遍化しつつ神学的に評価することに成功した。

なお、著者のアシェンソ・アデリノは1954年にポルトガルで生まれており、ポアノヴァ宣教会の宣教師である。師は日本での宣教活動を活発に展開し、諸宗教対話および日本文学研究における造詣の深さは世人の容易な追従を決して許さないほどの力量を備えている。彼は教皇庁立グレゴリアン大学の博士課程において論文を書いたが、その論文を土台として本書が完成している。

#### 2. 方法論と到達目標

本書の方法論は、第二章「文学と信仰」および第五章「基礎神学的評価」において極まっている。つまり、第二章では「想像力」が文学と信仰をつなぐ中軸となっていることが明らかにされており、第五章では「福音宣教以前の『人間性そのもの』を神学的な新しさの視座から見直す試み」が提示されている。より一層簡略化して言えば、「想像力をもって『人間性そのもの』を理解し直すこと」がアデリノの研究の方法論なのであ

る。ということは、従来の研究の仕方では遠藤周作の作品を神学的には読み解くことが出来ていなかったことが見えてくる。神学者というものは往々にして、なるべく想像力を排除して、理性を用いながら諸々の事柄の普遍的な構造の解明に尽くし、神の働きそのものが諸々の事柄に対して目に見えるかたちでいかに影響をおよぼしたのかを現実の分析をとおして反省する、という方法を採用してきたからである。それならば、アデリノによる研究方法は、従来の神学研究の方法論に染まることなく、別の通行路を示すことで、神学研究上の多様な認識の仕方に加え、従来の方法を決して破壊することなく、補完する可能性を開いたという意味で神学の遂行の仕方に豊かさをもたらしたのである。

そして、本書が目指す到達目標は、想像力を駆使して信仰を美的に理解する道を整えることである。まさに、「想像力」を信仰の言語として見定めたことが本書の第一の功績である。普通の日本人がキリスト教信仰の深奥を究めることは可能なのだろうか、という遠藤周作の終生の課題は「想像力」に着目することで解決の方途を見出す。その点に関してアデリノは以下のように述べている。——「遠藤周作は、想像力を使い彼の小説の登場人物たちが『語れない』神[←評者による註：「人間の能力をもってしては語り得ない」神、と翻訳したほうがよかったかもしれない]について彼らの人生を通じての愛として語らせることでそれを行っている」(86頁)。

### 3. 構成

本書は全五章で構成されている。第一章では「遠藤周作の伝記」が紹介される。第二章では「文学と信仰」の関係性が論じられる。第三章では「遠藤周作の小説」が分析される。第四章では「遠藤周作の神学」が確認されていく。そして第五章では「基礎神学的評価」が提示される。この構成の仕方からも明らかとなるように、第二章が方法論的な普遍的研究視座の確定となっており、その視座を基準にして遠藤の生涯(第一章)や作品(第三章)が丁寧に分析され、こうして遠藤が目指していた神学(第四章)が浮かびあがり、今後の読者たちによる読みの可能性(第五章)が開かれてくる。

### 4. 内容の批評

アデリノは、遠藤の38年間におよぶ執筆活動の代表作を10作品(9つの小説[『白い人』・『黄色い人』・『海と毒薬』・『おバカさん』・『わたしが・棄てた・女』・『沈黙』・『死海のほとり』・『侍』・『深い河』]と1つの評伝[『イエスの生涯』])を選んで分析していく。そして、遠藤の諸作品の根底に潜む神学的テーマとして特に①「苦しみと

悪」・②「罪と救済」・③「強さと弱さ」・④「キリスト論」という4つの方向性に焦点を当てている。

こうして観えてくることは、遠藤が探究していた事柄が「キリストと私との出会い」であるという一事である。遠藤は「同伴者としてのイエス」を実感するのだが、私たちに寄り添うイエスは常に「弱さの強さ」を示す惨めな姿で現れてくる。その惨めな姿を実感するときに、人間は「救い主」（キリスト）と出会うのである。遠藤は西洋から到来した宣教師によるキリスト教の表現をどのように受け留めればよいのかを苦悩しながら考えつづけた果てに形式や地域性にとらわれない「相手」としてのキリストと出会うことの重みに気づいたのである。遠藤の苦渋に満ちた人生を賭したキリスト探究の軌跡が、まさに文学作品において結晶化している。アデリノは西洋的な形式や地域性にこだわることなく遠藤に寄り添いつづけ（同伴者キリストと同じ歩み方を志したのである！）、あらゆる人間に共通する視座での研究を目指したがゆえに「基礎神学」の手法を本書の総括としての第五章で用いたのである。

アデリノにとっての神学理解は日常生活の当たり前の行いにおいて、各人がキリスト体験をいかにして深めていくのかにかかっている。その体験はキリスト教的教義の基底をなす「キリストと私との活ける関係性」の領域そのものから生じてくる。理論が先にあるわけではなく、むしろ活きた関わりこそが土台になっている。そのような個人的なキリスト体験は決して自閉的なものではなく、むしろ他者（神や隣人）へと開かれて共同体を成熟せしめる。その意味で個人的な出来事であると同時に普遍的な感受環境の土台となる。

ところで、遠藤周作の生涯を賭した思索が諸作品としての結実したのだが、その際に彼自身の心の底に潜んでいた想像力が発動し、独自の神学が形成されていく。そのプロセスそのものは遠藤の心の奥底だけの問題であり、私たちはもっぱら文書化された作品を読むことでしか推測することができなかった。そのような活きたプロセスを、アデリノが本書をとおして解明したのである。

上に述べたことを、文学と信仰という視点から詳しく説明しておこう。まず、アデリノは文学を以下のように定義づける。——「文学は、一般的に言って、生きた現実を表現する象徴的なものであり、現実とその意味、言葉と語られないものの関係を明らかにする」（87頁）。つまり、文学は現実の意味を「たとえ」（シンボル）を用いて表現することで、物事の奥に潜む「語られない真実」をも示す手立てである。ということは、文学の力を用いれば信仰の領域の事柄をも解明することが少しは可能になる。

そして、アデリノは信仰を以下のように説明している。——「信仰は理論ではなく

出来事であり、冷たい事実ではなくドラマである」(81頁)。そして彼はロナガンの「信仰は宗教的愛情から生まれる知識である」(註126:81頁)という意見をも引用している。つまり、信仰とは愛情に支えられており、出来事かつドラマとして体験されるものである。

こうして、アデリノにとっての文学と信仰とは相互補完的に連動する。彼は遠藤周作という一人の人間の心の奥底に潜むうめきがいかにして作品化されていったのかを解明すると同時に、遺された作品を読むことで私たちが自分の心の底に潜むうめきを理解する方法を確立したのである。つまり、彼は、遠藤という特異な一人物の生の軌跡をとおして、特に東アジア地域の人間がキリスト教信仰をいかにして納得したかたちで受容していくのかという普遍的道筋を欧米圏域の人々にも理解可能なかたちで示すことに成功したのである。

なお、アシェンソ・アデリノによる論考「国境をこえる遠藤周作の信仰表現——世俗化した社会において神聖なものへの渴望に応える宣教」(『宣教学ジャーナル』第5号、日本宣教学会、2011年、23 - 50頁所載)も、『遠藤周作——その文学と神学の世界』を読み深めるうえで参考になる。

(阿部伸麻呂)